

FADO

17

Janeiro 1998

月田秀子フアド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

あなたの瞳が 喜びで輝く時
森の小鳥たちも さえずり
私は共に唄おう

あなたの瞳が 哀しみに翳る時
海さえも 輝きを失う
私は共に泣こう

あなたの瞳が 怒りに打ち震える時
雷鳴が轟くだろう
私は共に拳をあげよう

誰にも見えないかもしれない
誰にも聞こえないかもしれない

けれど 私にはわかるのです

なぜなら
私にとってあなたは
大地のように
海のように
空のように
風のように
地球のように
かけがえのないものだから

皆様、それぞれ新たな思いをむねに新年を迎えられた事と思います。今回の三都公演が、フアド唄い月田秀子の10年をしめくくり、次へのステップへのヒントを与えてくれたような気がします。貴重な助言も、苦い批評も、熱い賛辞もいただきましたが、いろいろな思いがこもった拍手に、いま思いを馳せています。そして、おぼろげながら、前方に灯りが見えるのです。私の心は高鳴っています。焦らず、じっくり小さな事をまずは大切に歩みを進めて行きたいと思っています。ギタリストの池側忠、野上圭三、佐野健二共々、本年もよろしく、ご声援下さいますようお願い申し上げます。

月田秀子



月田秀子の昨日、今日、明日...

「あと何年、こんな風に活動して行けると思う？体力的なことを考えたら、もっとも良い状態でやれるのは、あと5、6年でとこじゃないかと僕は思う。だったら、思いっきり、やってみようよ。金のことより、やりたい仕事を一杯やっつけていこうよ。ギターの野上圭三こと圭ちゃんが、楽屋で呟いた言葉を忘れない。灯りが見えたのはそのときからだった。私達（あえて私ではなく）を、音楽表現へ駆り立てているのは、金儲けではなく、様々な人達との、そして、自身との出合いを求めている事なのだ。私は、初めて、心強い同志を得た思いがしている。

一年の計は元旦に有りなんて誰が言ったのか知らないけれど、この調子で行くと、私はこの一年もバタバタとほこりを立てながら過ごして行きそうないやな予感。とぶつぶつ言いながら、三都公演の清算書を書いている1998年1月1日。大阪・サンケイホールでの収録テープをダビングしながら。この作業は当分終日続くのだ。亭主、子供等家族がいたらこんなこともできないだろうが、まあ、独り身の気ままさにまかせて今年も生きてみるか。そう割り切ると、世間様と足並みを揃えないで済む気楽さが私を慰めてくれる。「月田さん、来年は、長期休暇の予定は、ありますか。ポルトガルへ行くとか、結婚するとか。」サンケイ企画のN氏から、先日問い合わせがあった。「ないな、ついでに産休も有り得ないね。」笑いながら答えた。

12月30日朝11時半、電話のベルが鳴った。神戸の「FMわいわい」生出演が12時からあったのだ。神戸の大橋氏が担当している番組で年末特集「情熱と哀愁のラテンポップス」という2時間番組のトップを私のおしゃべりで始めようと企画してくれたものである。飛んでも跳ねても間に合うはずがない。番組放送中には着くだろうと言う事で、化粧もせずに飛び出した。そこは、ラジオの強みである。「FMわいわい」のスタジオに着いたのは1時前、石川敬子さんのフラメンコ仲間の歌と踊りでプレハブ作りのスタジオは壊れんばかりだった。出演の順番を変える事で何とか番組終了。

DJの大橋氏は、創業35年になるという父君の代からスペイン料理『カルメン』を経営する一方『まろうど社』という出版社の代表でもある。彼の持つ『南の風』という番組では奄美の島唄を紹介してきた。島唄とフアドは、生まれから育ちまで非常によく似ていると言うところで意見が一致。「島唄の魅力はなんといっても、奄美の人達の生活に密着した、素材で、しかも力強い民衆の歌であることだ。と同時に島唄は奄美の人達がたどってきたイストワール（歴史・物語）の優秀な記憶装置でもあるのだ。私が『南の風』を制作する際に常々思っていることは、現実生活とかけ離れて伝統芸能になってしまった本土の民謡や、商業主義と切り離しては考えられない消費財としての歌の氾濫の前で、奄美島唄の持っている魅力を本土のリリスナーに伝えることで、今日の労働の疲れを癒し、明日への元気の素となる民衆にとっての本来的な“うた”とは一体なになのか考えてほしい、そのキッカケにこの『南の風』の番組があれはいいと位置づけているのである。」（南海日々新聞より）私の表現力をもってしたら1時間ぐらい費やしてしまいそうな内容をこんなにさりと端的に表現できる大橋氏に脱帽。ちなみに彼の名前は「愛由等（あゆひと）」これにも脱帽。

最後になったが「FMわいわい」は95年の神戸大震災直後、長田の定住外国人向けに情報を発進していたミニFM局が前身で、震災から丁度一年後の1月17日に放送を開始したという。当時、震災ボランティア活動の拠点の一つだった神戸・鷹取教会にある。

又、奇遇なことに、そのチーフプロデューサーの野村氏は、黒田清氏が主幹する『窓友新聞』で紹介されたギタリストのむらあきさんその人であったのだ。震災から3年目の一月、二枚目のCDを出すという。神戸のおーまきちあきさんと共に、「釜ヶ崎の公園で、仮設住宅で、居酒屋さんと、『うた』という救援物資を『配り』続けてきた。」（窓友新聞 12月号）人である。

〈特集 三都公演〉

〈大阪編〉

■今回初めて大ホールでの月田さんの歌を拝聴させていただきました。マイクを通さぬ月田さんの歌は どこか土か風の香を漂わせるような気がするのですがコンサートではより popullar にでも美しく響いておられました。初めて知ったことに カンツオーネなど耳あたりのよい歌は 月田さんには難問ではないのですね。で どんなにうまい歌手でも FADO を歌える人は稀少なんではないでしょうか。ギター演奏も素晴しかったです。ライブハウスでギター演奏が始まると 美しい響きに驚き 思わず姿勢を正し飲食を中断するのですが コンサートでも 歌が終了し最後の余韻が消えるまで謹聴しておりました。

私の各種ステージへの出席率は平均1.2回/年程度のものですが fan 歴は7~8年と結構長く鍾乳洞的であります。私の一方的な出会いは 枚方市牧野図書館の一室でのフォルクローレコンサートにゲスト出演されていた月田さんです。"高野悦子さんの時代に time slip したような(この方も立命館です)この人は どうやら日本人で女性のようなが 何処で生息しているのだろう?どうすればまた聞けるのだろうか?手がかりの無いまま日々は過ぎましたが、大阪市教育委員会が発行する"いちょう並木"を毎月読んでいた真面目な学生の私に朗報がもたらされました。近鉄矢田駅から矢田解放会館までの道のりは妙に暗くさんさん迷い 学年末試験前の私をいっそう心細くしましたがやっここで再会、FADO CLUB の存在を知り 月田さんへの糸口をめでたくつかんだのであります。現在脳神経外科5年目の医師で 西成のおっさんに怒鳴られ殴られかけてもひるまず挑む"怪獣並の体力と根性"と周囲をいわしめておりますが power の源はと問われれば迷わず"明日のジョーと月田秀子さんのうた"と答える 極めて地味な fan です。

他の皆さんはどんなきっかけを以て月田さんと出会うのでしょうか?

恐らく多くの感激や感謝の言葉が月田さんに寄せられていることと存じます。私はまだ未熟で何故月田さんの歌が好きなのか考察できないのですが、結語として言えるのは"自分が現在の月田さんの年齢(不詳)に達するまで月田さんの歌を聞き続けたい"と言うことです。今年もどうぞがんばってください。

(大阪/Y. K子)

■暮れの28日サンケイホールでファドコンサートを聴かせていただきました。心の叫び、内面を洗うような響き、すばらしい感動を与えてくれました。小生以前にNHKBS II「世界わが心の旅」で新田次郎さんのご息子が「サウダーデ」の心を求めてポルトガルに旅行し、ファドを聴く場面がありますが、ファドに興味を覚え、昨年ポルトガル行を思い立ちアルファマ地区のファドレストランでこれを聴いた経験があります。団体旅行であったためかかなりショー化された内容であり、少しイメージが違うかなと思いましたが、今回あなたのファドを聴き、これが本来の「ファド」なんだと感激した次第です。有難うございました。神戸では北野のクラブ等でジャズのライブが盛んですが、(北野、元町や居留地も良いのですが)、灘の酒蔵(再建された神戸酒心館ホール)などでファドコンサートをやれば以外と面白いと思うのですが・・・神戸はモラエスゆかりの地でもありますしね。今年もファンみんなに人生の喜びを与え続けられるよう、健康に留意され頑張ってください。草々

(神戸/辻雄史)

■12月28日は、ステキなコンサートをありがとうございました。昨年、97年1月アートクラブ、そして今回の合計3度の未熟者ですが、昨年に比べると暖かく、豊かで、わかり易い舞台だったと思います。

私自身、日々の生活が多忙を極めているだけに、年の瀬に一年を振り返りながら聴いたFADOは非常に感慨深いものでした。

来年も同じような形で、歌声を聴くことが、できればと、買ったCD「私の憂い」を聴きながら、願っています。

(姫路/W. M子)

■開始のベルは鳴らない。代わりにの鐘の音が聞こえてきた。そのまま街のざわめきとへと変わっていき、それに合わせてリスボンの街が映し出されていく。ギターの前奏、そして歌が始まった。新しいアルバムの最初の部分をそのままイメージしたものだ。

またサンケイホールでのコンサートの季節がやってきた。しかも今回は東京、名古屋、大阪と『三都公演』というで形だ。今回はほんの少しだけ手伝う事になったので最初からゆっくりと聴くことはできなかったが、それでも合間合間に聴く月田秀子の姿はいつもと変わらない。いつも聴くのは小さいライブのスタイルなので、大きいホールだと雰囲気が違う。無論いい雰囲気だ。

一部は新しいアルバムからと聴き馴染んだ曲を中心と進む。いつもの二人の伴奏ではなく、四人もいる。ポルトガルギターとギターにリュート、ベースが加わると音も一変する。これがまたいい。月田秀子もそれに合わせて気持ち良く聴かせてくれる。舞台の裏では手伝いが失敗しないようにと折りつつ、なんとか終わった。一部で手伝いは終わりであった。さあ、二部はいつも通りゆっくり月田秀子の歌を聴くことにしよう。

二部の始まりはファドではなかった。カンツオーネ。意表をつくとかそんな感じはまったくない。次は佐野健二のリュート独奏で始まる。はて?なんの曲だろうと聴いていくと月田秀子が歌い出す。分からない、一体なんの曲だ?。やっとなんか分かった。「ラ・ラ・ラ」だ。しかしいつも聴きなれたのとはこんなに違うのかと思う感じ。月田秀子はいつも変幻自在、どんどん変化していく。「孤独」に続き池側忠と野上圭三のデュオでの演奏。ここでも大いに盛り上がる。見事な掛け合い。歌は「難船」「暗いほしけ」へと続く。もう何回聴いたのだろうか。やはりいつも聴くたびに違う。しかしいつも思う、なぜなんべん聴いても飽きないのだろうか。アンコールは「竹田の子守歌」と「歌に憑かれて」。歌に憑かれて...、月田秀子の気持ちそのままを曲にしたような感じだ。

月田秀子の歌は私に心地好さを与えてくれる。皆が言うようにそれ以上の何かを与えてくれる。それが何なのか、人それぞれ違うはずが、私自身ははっきりと答えを出すことはまだ出来ない。と、いうよりも言葉にするとか形になるとかいった次元でもない事も分かる。ただいつも、歌を聴いているとほっとするという事実。

「10年目のターニング・ポイント」だと言った月田秀子。その言葉はこのコンサートでみごとに表現された。また次の一步が楽しみだ。

(大阪/K. T)



歌った… 観た… 聴いた…

〈東京編〉

■私と月田秀子はおさななじみです。小学生の頃、夏休みになると毎日遊んでいたのです。その頃の2人はおかつば頭で今のチビまるこちゃんのTVそっくりの生活をしていました。それからナン十年一度も会う事もなくそれぞれの道を歩き出しました。

「ファドって知っている?」「ナニソレ?」「ポルトガルの古い民謡で日本で歌っている人は月田秀子だけだ」と知り合いの人からさそわれて初めて聞きに行ったのが12/11のシアターアプルです。ギター2本をバックにステージで歌う月田秀子を見ました。長い髪、黒いドレス、ツヤのある声、発音のキレイさ、あの声量、どれをとっても1人のいい女に変えています。あの時のチビまるこはどこへやら。

ギターだけで続けざまに歌う月田秀子。日本でこんな風に歌える歌手が他にいるだろうか。海に行った男をいつまでも待っている女の歌をうたっている時はスケールがデカイにもかかわらずたよりなげな暗い悲しい女になっているし、酒場できつとポルトガルはいいもんだ、なんて陽気な歌を歌っている時は楽しげでやはりデカイ。言葉はゼンゼン分からないけれど私の想像はどんどんふくらむ。さっそくCDを買って聞く。ステキだ! ウマイ! 私もポルトガルに行ってあのギターの音色にさそわれて町をさまよい歩きたい。

現在気分続行中。月田秀子 夢をありがとう。

(東京/なほみ)

東京公演のアンケートから アンケート記入者総数 112名

●今回のコンサートを何でお知りになりましたか?
 ポスター 2% チラシ 4% 雑誌びあ 2% 雑誌LATINA 1%
 知人の紹介 43% Internet 1% 新聞 47% 不明 2%

予想以上に効果があったものはコンサート直前の朝日新聞の掲載記事。また東京での月田ファンの活動も大いに効果があったようだ。もっとも一般の目に触れやすい新聞でこれほどの効果があった裏にはいかに情報が少ないか、すなわちどれほどの人が情報を待っていたかが伺える。

●月田秀子のコンサート(ライブを含む)をお聞きになるのは何回目ですか?

初めて 63% 二回目 16% 三回目 3% 四回目以上 13% 不明 5%
 圧倒的に初めての人が多いが、正確な把握にはならない。最低でも半数は常連のファンのはずだからである。常連さんはあまりアンケートを書かなくなってしまうようだ。しかし入場総数からこのアンケートを書いた初めての人の数は、注目に値する。意見欄で多くある通り来て良かったと言う意見が多数を占めている。

●次回のコンサートやライブに期待しますか?

はい 93% いいえ 1% 不明 6%

●期待するとお答えの方にお尋ねいたします。(複数解答あり)

今回と同じくらいの場所、金額のコンサート。 30%
 食事付きで、100名くらいのホールのコンサート。 14%
 小さな酒場で、お酒を少々飲みながらのライブ。 52%
 その他 4%

予想どおりと言うべきか、当然と言うべきか。しかし今回と同じくらいの場所が多いのは以外であった。

●アンケート記入者 年齢・性別

男性 32% 女性 64% 不明 4%
 10代 0% 20代 13% 30代 9% 40代 14% 50代以上 60% 不明 4%

女性が7割! もっと男性ファンが多くてもいいはずだが...。50代以上が多いのは当然として、予想以上に若い女性が多いのも特徴である。

〈名古屋編〉

■97年12月22日、「月田秀子ファドコンサート」を愛知芸術劇場小ホールで開催した。2回目である。

初回は96年12月13日に同ホールで開催。プロセスは山あり、崖あり、泉あり。

チケットを差し出すと、「ファドってなに?」という人口96%、「ファド知っている」人口 5%。無理もない。名古屋でファドコンサートはまだ1回も行われていないのだから。

それでも、友情・地縁に恵まれてホールは満席となり、コンサート終了後には新たなファドファンが多数誕生した。

2回目である今回は、朝日、毎日、中日の3紙が取材記事を掲載してくれた。12月に入って、それが波状的にかつ思いがけないほど大きく報道されるや、その度に反応の波が押し寄せて来た。

「ファドが大好きで、ポルトガルまで行って来ました。名古屋で聴けるなんて嬉しい」

「映画(過去を持つ愛情)を見て以来、ファドを聴きたいとずっと思っていた。」

「長崎に住んでいます。コンサートには行けないので、CDを送ってください。」

「鳥取から聴きにきます。家に泊めることになっているので、その子分だけでもいいから何とかしてください。前日に連絡します。」...

11月中にすでに半数は売れていたもので、またたくまに完売。その後も間断なく電話がかかる。

「立ち席でもいいから、なんとかお願いします。」

「今日の新聞で見て、すぐ電話しているのに、チケットがないなんてひどいじゃないですか...」

ファドを聴きたいと願ってくださることへの嬉しさと、お断りするしかない切なさで、受話器をとる気持ちは千々に乱れる。282席きっかりで打ち切らなければならぬ。立ち席禁止、の消防法なるものが恨めしい。

《月田秀子ファドコンサート'97名古屋公演》は、かくして開幕し、12月22日の愛知芸術劇場小ホールは、聴く人々と演奏する人々との魂が合体し共鳴する小宇宙となった。

ファドのファンは年齢層が高いという。月田さんに語ったという五木寛之さんの言葉がそのわけを言い尽くしている。

『人間は喜ぶ、つまりプラス思考に身をゆだねるだけでなく、悲しむこと、絶望すること悩むこと、それが本当の意味での深い悩みであり、悲しみであり、寂しさであり、憂うつである限り、それによっても同じように人間の命というものは生き生きと活性化されてくるに違いないというふうに思います。』

『ファドを暗いという意見には僕は反対なんです。ファドは暗くて明るい、そして絶望に満ちていて、希望に満ちている。僕はそう思うんです。』

私もそう思う。深い絶望は、激しく人生を希求した証だ。強いエネルギーを内包している。

この深さを知るにはそれ相応の歳月がかかるだろう。

今年もまた名古屋で《'98 月田秀子ファドコンサート》開催したい。かつて絶望の波に晒されていたころ、私は月田さんのファドに出会った。歌声に呼応して、私の細胞たちが再び生きようとぞわめき始めたのを感じた。その体験が毎日に行動を起させる。

月田さんが、孤独な彷徨の中で探し求めたアルマ(魂)、それを同じように求めている人は、もっともつと必ずいる。この2年の経験がそれを確信させる。

その人々に、いかに情報を届けるかが課題だ。それはとてもやりがいのある課題だ。

(スタジオ白象/水谷静子)

vamos cantar !

暗いはしけ 訳詩 Caldo Verde

あの朝私は砂浜で震えて目が覚めた
あんに醜いと思われるんじゃないかと怖くって
だけどすぐ あんたの目がちがうよと言ってくれた
私の心に太陽が差し込んできた

岩の向こうに十字架が見えた
あんなの黒い舟影が光の中で踊っていた
出て行く舟帆の間から あんたは手を振っていた
浜のばあさんたちはあんたがもう帰らないと言うんだ
おろかな女たち！
おろかな女たち！

私にはわかっている
私のあの人と離れやしないよ
だって いろんなものが告げている
あんたはいつも私と一緒に

(くりかえし)

ガラス窓に砂を叩きつける風
消えかかった灯に歌う水
空っぽの舟を照らすあつたかい月の光が
私の胸の中であんたはいつも一緒に
空っぽの舟を照らすあつたかい月の光が
私の胸の中であんたはいつも一緒に

アー...
私にはわかっている...
(くりかえし)

BARCO NEGRO

De manhã, com medo que me achasses feia
acordei, tremendo, deitada na areia
Mas logo os teus olhos disseram que não
E o sol penetrou no meu coração.

Vi depois numa rocha, uma cruz
E o teu barco negro dançava na luz
Vi o teu braço acenando, entre as velas já soltas
Dizem as velhas da praia que não voltas
São loucas !
São loucas !

Eu sei o meu amor
que nem chegaste a partir
pois tudo meu redor me diz
que estás sempre comigo

(refrão)

No vento que lança areia nos vidros
Na água que canta
No fogo mortíço
No calor do luar
Nos bancos vazios
Dentro do meu peito estás sempre comigo

Ah...
Eu sei o meu amor que nem...
(refrão)

Caldo Verde の紹介

1991年3月某日、東京の郊外のある寿司屋の2階で、その年生協の班長をしていた人達の打ち上げ昼食会をしていました。一人がふと周りの人達に向かって、「ポルトガル語って、どこの国の言葉か知っている？」「そう、ポルトガル、それからブラジルもポルトガル語なのよ。でも日本にとっても近いところでポルトガル語を使う所があるのよ。」誰もわかりません。「マカオ。ほら香港のすぐ近くにある小さな島。」「ええ〜！」「ねえ、ポルトガル語をやって、マカオに行くって云うのどう？」すると居合わせた人達全員が「それいいわー。やりましょう。」と云うわけで、町の自治会館で Bem dia ! から始めて一年後には、マカオ旅行を実現しました。呼びかけ人以外の4人は、生まれて初めての、海外旅行でした。マカオはポルトガルの古い雰囲気と中国風とが混ざった独特の所です。有名な Teixeira 神父様にお会いして生まれて始めてポルトガル人の話すポルトガル語に接し、チョッピリ話しました。こうして、自称「研修旅行」の面目をほどきました。

さて、当初、呼びかけ人としては、ここまでのつもりだったのですが、誰も止めるとは云いません。引き続き会話やら簡単な文章やらを学んで、次の目標はポルトガルということになりました。と云うと大変勉強家な聞こえますが、始めからペースは月2回、1回約15〜2時間の亀の歩み。時にはポルトガルの映画を観に行ったり、ブラジル人とお会いしたり、プ

ラジル料理を食べに行ったり、時には全てをそっちのけにして、お喋りしたりと、巾広く活動してきました。

1996年5月、次ぎの目標だったポルトガル旅行を実現しました。残念ながら全員というわけには行きませんでした。リスボンを中心とした手作りの旅を一週間、目一杯楽しんできました。ファドと共に過ごした夜があったことは云うまでもありません。そうして日本に帰って、間もなくメンバーの一人が、ふと立ち寄った街のレコード屋で見つけた Amália のCDを私たちの会に持って来たのです。どれどれと聞いてみますと、なかなか良いではありませんか。元の歌詞と日本語訳の歌詞がついているので読んでみますと、何だか歌詞にそぐわない日本語の訳があり、元の詞の良さが伝わっていません。“これでは FADO が可哀想、私たちでやってみましょう。”と一曲ずつ翻訳に取り組み始めました。

やっているうちに、だんだん歌の内容に引き付けられていきました。以来、もっぱらファドと取り組むことになりました。ファドの良さをわかって頂けたらという夢も膨らんできました。グループの名も「Caldo Verde」と定め(1997年3月)、喜んでファド漬けになっている昨今です。

Caldo Verde 清水茂美

ニューアルバムCD 「私の憂い」 好評発売中！



<収録曲>

私の憂い・静かな道・老いに寄せるバラード
私の中のファド・歌に憑かれて・神よ許し給え
置き去り・吹き行く風のバラード
すみれの少女・サウダーデ・さらばリシュボア
愛する人へ・暗いはしけ・難船

ニューアルバムCD『私の憂い』は、自主制作のため、レコード店には置いていません。ご希望の方は、郵便振替にてお申し込みください。その際は、必ず通信欄にCD「私の憂い」申し込みとご記入ください。

CD代金：3,000円（消費税込み）

郵送手数料：400円（ファド倶楽部会員は不要）

口座番号：00990-6-18440 月田秀子ファド倶楽部